【論文の書き方講座】

実践報告においてなぜ／どのように先行研究と向き合うか

年報編集委員会副委員長　福嶋 祐貴
（京都教育大学）

はじめに

『日本教育事務学会年報』（以下、年報）は、日本教育事務学会の学会紀要である。学会紀要とは、会員が論文等の研究成果物を発表する場となる定期刊行物である。学会紀要に掲載されるには、他の学会員による査読を受け、掲載可と判定されなければならない。なお、査読の有無で学会誌と学会紀要とが区別されることもあるが、教育学系の学会ではその区別がなされず、慣例的に学会紀要と呼ばれることが多い。

「論文の書き方講座」は、この年報に研究成果を発表しようと考えている会員に執筆や投稿のポイントを伝え、サポートしようとする企画である。それとともに、会員が研究成果を積極的に発表できるよう促進するねらいもあると考えられる。教育学系の研究を乱暴ながら理論研究と実践研究に大別した場合、理論研究の担い手は大学の研究者など学術的なトレーニングを受けてきた者がほとんどであることから、本講座の主な対象は実践研究（とくに「実践レポート」）の主な担い手である実践者とされている。

本講座が年報への投稿を支援・促進するねらいを持っているとは言え、現実的には投稿〆切を迎えたばかりである（2022 年 7 月 9 日現在。投稿エントリーは 5 月末、論文提出は 6 月末にそれぞれ締め切られる）。そこで今回は、論文の構成やタイトル選定といった執筆時のポイントというよりも、論文完成までの道程において相当な時間をかけて行うべき作業や考え方を中心に扱っていく。具体的には、論文執筆にとって不可欠な存在である先行研究との向き合い方、すなわち先行研究とは何であり、なぜ必要なのか、そしていかにしてそれらを集め、扱えばよいのかといったポイントについて述べていく。

１．なぜ先行研究と向き合うことが必要か

（１）「実践レポート」について

年報の投稿規定によれば、会員からの投稿を受け付けている自由研究論文のカテゴリーは「研究論文」「研究ノート」「実践レポート」の三つである。いずれも教育事務に関する研究成果を文章にまとめるものであり、このうち「実践レポート」は、特に公表することが望ましい実践内容について、今日的な課題を念頭に置きつつ報告する論文のカテゴリーである。「実践レポート」と銘打たれてはいるものの、自由研究論文の投稿カテゴリーである以上、いわゆるレポートではなく論文としてまとめる必要がある点には注意が必要であろう。

いわゆるレポートと論文との違いは、高等教育で指導すべき内容のひとつである。近年では、課題探究系科目の設置が進んでいることから、後期中等教育でも指導されることがある。大学で学生指導に当たる人間としては、卒業論文を執筆する学生に「これでは論文でなくレポートにとどまってしまう」と指導することはもはや恒例行事と言ってよいかもしれない。「総合的な学習の時間」の功績もあってか、いわゆる「調べ学習」の経験は多くの学生が持っており、一定の文章執筆能力があればレポートを仕上げるのは比較的たやすい。ところが論文となると、とたんに難しくなることがしばしばである。

レポートと論文の一番の違いはその力点にある。あるテーマが設定され、それに従って様々

な事実や議論を調べてきて報告するのがレポートである。加えて自分の意見や主張をまとめとして織り込むことが求められることもあるとは言え、報告のレベルにとどまっていてもレポートであればある程度許容されるものである（成績評価は別として、少なくともレポートとしての体裁は整うということ）。

一方で、論文も当然、何らかのテーマに沿って様々な事実や議論を調べて書きとどめることが必要になるわけであるが、論文であろうとすればさらに、筆者の主張を結論として提示し、その結論に至るまでの論証過程を厳密に組み立てることが求められる。論文を通じて、自らの導き出した結論でもって、世界中の人々に、新規性のある知見をもたらすことが期待される以上、論文には多くの読者にアピールできるだけの説得力が不可欠である。

そうした説得力は、テーマの切実性、課題意識・主張の明確さ、データの分厚さ、整然とした論理展開など多くの要素から引き出されるものである。よく調べているように見えるけれども何のために書かれたのか・結局何を伝えたいのかがわからない、と言いたくなる文章は、レポートではあっても論文とは見なされにくい。

したがって、「実践レポート」も、論文のカテゴリーであって査読を受ける以上、限られた分量の中で一定の説得力を持った論述にしなければならない。単に実践した内容を時系列に沿ってまとめただけでは論文にはなりえない。たとえそこに私見が含まれていたとしても、いわゆる論述になっていなければ説得力は弱くなる。

（２）実践研究の意義と課題

では、「実践レポート」には何が期待されているのであろうか。実践の意義や理論と実践の関係という問題は、多くの学問分野において論じられてきた、きわめて重要かつ根底的なテーマである。これはとりわけ、理論が「実践に役に立たない」として不当に退けられることがしばしばある教育学においては、切実な問題である。これだけで学会の課題研究や研究集会が成立しうるほど広大な問題領域であるので、本講座では、あくまで参考事例として、実践研究論文の執筆という点に関して、他学会でかつて交わされた議論を記しておく。

日本教育心理学会では、機関誌『教育心理学研究』に「実践研究論文」というカテゴリーが設定されている。心理学と言えば、実験等によって量的あるいは質的なデータをとり、それをもとに理論的に成果をまとめていく研究が中心になる。ところが教育心理学になると、それが教育実践に一定結びついて展開してきた以上、実践研究もまた重要な位置づけを与えられる。

教育心理学では、たとえば次のような点が実践研究の意義として挙げられている。①心理学では十分に取り上げられてこなかった問題に気づく（テーマの発見）、②どのような介入が有効であるかの感触を得るとともに、その限界を自覚する（要因への着目とその限界の自覚）、③調査や実験を通じて明らかとなった要因を、授業の中でどのように具体化していくかの方法を知る（具体化の方法）、④他の実践の特徴に気づきやすくなり、他の実践の観察から新たなアイデアを得る（自らの実践や他の実践の相対化）、⑤学校において指導する際に配慮するべき点を知る（指導上の留意点の自覚）など（下山他、2009）。

こうした実践研究の意義を踏まえ、日本教育心理学会では「実践研究論文」カテゴリーが設けられたものの、そこに寄せられた肝心の実践研究が、「ただの実践報告でしかない」と批判されることもあったという。その理由は「先行研究のレビュー・方法・結果・理論的な検討などがきちっとなされないため」とされ、「このスタイルが軽視される現状がある」という注意喚起がなされた（市川他、2007）。

このことは本学会の「実践レポート」に関しても当てはまる可能性がある。教育事務論における実践研究は、教育経営学や教育行政学をはじめとする学問分野の理論的な視点ではとらえきれないような問題をすくいあげ、実践事例を

もとに解き明かすことが期待される。あるいは、そうした理論が実践において持つ妥当性や具体性を験すこともありうる。また、先の④のように、他の実践者による他の現場での実践にインスピレーションをもたらすとともに、実践の長所・短所を読み解く眼鏡を構築することになる。しかしそれは、先行研究の検討をはじめとする、基本的な研究スタイルを通してこそ可能となるのであり、そこを欠いた実践研究は、論文でなくレポートにとどまってしまうのである。

（３）先行研究を検討する意味

たとえば次のような疑問が抱かれるかもしれない。実践報告は自分の実践事例を報告するものであって、自分が直面した課題や、それを解決するための手立て、そして解決過程での苦悩や葛藤などをありのままに、赤裸々に報告することに意味がある。そうであるとすれば、そこでなぜわざわざ他者の理論や実践である先行研究に目配せをする必要があるのか？　あるいは、確かに問題の解決にあたって他者の実践が何かしらのヒントを与えてくれることはあるから、他者の事例を参考事例として挙げることはあるだろうが、そのような他者の事例研究を検討対象にまで据える必要がどこにあるのか？

確かに報告される実践事例の持つ個別具体的な性質は、その存在自体が一般的な議論に終始する傾向にある理論研究を問い直すことのできる潜在性を有している。その意味で、実践を報告すること自体に一定の意義はある。

しかしながら学会誌に掲載される論文となれば話は別である。なぜなら、同じような問題に、同じような解決策で取り組んだ事例がある可能性もまた残されているからである。既に先行研究で報告されている類の実践であれば、そちらの論文を読めばよいのであって、（悪く言えば）焼き直しのような論文を読む意味はないのである。類似の論文が存在する意味はないし、経済的でもない。むろん、先行研究のアクセシビリティがよくないなどの点で必要性が見出されることもあるかもしれないが、それは論文の内容に関わる価値では決してない。査読で検討されるのは論文の内容であって、発表形態ではない。

また、先行研究に目を向けず、自身の実践に閉じた実践報告は、学術的な水準にはまず達しえない。そこには、論文にするうえでの出発点である研究上の問い（なぜ／どのように／どうしたら～か）はあるだろうし、そこで提起された問題を肯定的に捉えるのか否定的に捉えるのか、すなわち問題意識（～については……ではないか）まで明示されているかもしれない。しかし論文である以上は、もう一歩進めて、課題意識をも示すことが必要である。課題意識は、論文が取り上げようとする問いが、学術的に、どのように・どの程度研究されてきたもので、どこまで明らかになっていて、どこに課題が残されているのかといった、その研究課題に対する執筆者自身の意識を指す。これを示すには当然、先行研究に当たらなければならない。

したがって、論文である以上、先行研究を丁寧に検討することによって、自分が発表しようとしている論文のオリジナリティをアピールしていくことが必要となる。質の良い論文は、先行研究を網羅したうえで、自身の存在価値を説得的に明示しているものである。では、それはどのように、どんな視点で行うものなのか。次にその中身を見ていこう。

２．どのように先行研究と向き合うのか

（１）先行研究を検討する視点

なぜ先行研究と向き合うことが必要なのかを認識できれば、先行研究をどのような視点で検討していけばよいのかも自ずと明らかになる。自らの実践上の問いを課題意識にまで高め、オリジナリティをアピールするためには当然、自らの研究課題に関連する先行研究を収集し、読み込んだうえで、先行研究では①何が（研究対象）、②どのように（研究方法）、③どこまで（研究水準）明らかにされているのか＝明らかにされていないのかを読み解かなければならない。

ただ、この作業は膨大な時間がかかるうえ、作業量もきわめて多くなるため、その都度研究ノート（文書ファイル、ノートアプリケーションなど含む）に記録していくことが有効である。

いま挙げた三つの検討視点のうち、③について補足しておきたい。先行研究を検討するにあたり、その研究で何が明らかにされていないか、すなわち当該研究に残された課題をも認識する必要がある。これによって、従来先行研究によって明らかにされてきたところに何らかの新しい知見をもたらすことが、後続する論文には求められる。過去の先行研究の内容を反復するだけでは、最悪の場合、剽窃という研究不正行為を疑われかねないのである。これは学部生の卒業論文であっても同様であるし、当然、年報の「実践レポート」でも同じことである。

ただ一方で、おいそれと新たな知見が明らかになるわけではないという現実もある。ふつう研究の世界には、理論研究であろうと実践研究であろうと、これまでに数多の先行研究の蓄積があるものであって、その分厚い蓄積のすべてに見事に当てはまる陥穽など、なかなか見つかりようがないのである。ライフワークの成果として当該先行研究を発表した研究者がいることも多くあり、そうしたハイレベルな専門性を有する識者の知見に残された課題を摘出するには、同じレベルの高度な識見を有していることが求められがちである。もちろん先行研究者自身が、自らに残された今後の課題として論文内に明記していることも多いのであるが、そのように明示された課題は大概既に誰か他の研究者によって取り組まれているものである。

また、テーマによっては先行研究が豊富にありうるが、それが膨大であればあるほど、そこに残された課題を見出すのが難しくなるとともに、それらの研究を読み込む際のある種の粘り強さが弱まっていき、結果としてそれぞれの先行研究を不当に軽んじてしまいかねない。理論研究を取り上げて、その理論が有する本質的な課題や論点を見抜くことなく、単に「この論文には具体性がない」だの「実践的な視点がない」だのといった表面的な「課題」を指摘するようなケースは、まさにそれに当たる（急いで断っておくと、もちろんそうした「課題」が本質的な弱点になりうることもある。しかしながら、当該理論研究論文の構成上・分量上の都合によって記されていないだけであることが多い）。比較的新しい研究分野である教育事務論には、このような課題はなかなかないかもしれないが、しかしテーマによっては他分野にまで目配せする必要があるだろうし、先行研究が豊かに蓄積されている可能性も十分考えられる。

このように、先行研究を検討して、新たな知見を提示するための基盤を築き上げることは得てして難題になりがちである。しかしながら、そうであったとしても、論文である以上はそこを志向して執筆されるべきである。パラダイム・シフトを引き起こすような論考である必要はない。先行研究を読み込んで、苦悩しつつも自身の研究にオリジナリティを見つけながら、蓄積されてきた先行研究の水準から「自分なりのぎりぎりの一歩」を踏み出した論文を書くことが求められるのである（田中、2017、p. 138）。

（２）先行研究に学ぶ

以上のように書くと、先行研究は戦うべき・乗り越えるべき相手であるかのように見えるが、決してそればかりではない。学術界には、「巨人の肩の上に立つ」という金言がある（論文検索サービスGoogle Scholarのトップページを見てほしい）。先行研究は「巨人」であり、自分が提起しようとしている新たな知見を支えてくれると同時に、新たな知見を提起しようとしている自分をその境地にまで高めてくれる存在である。

そう考えると、先行研究は敬意を払うべき存在であって、そこには学ぶべきものがたくさんあると言える。先行研究から学べるものは、①先行研究の引用・参考文献、②先行研究の論理展開・論証過程と大別できるかもしれない。このうち前者は、先行研究を「情報として読む」

場合に当たり、後述する先行研究の探し方にも関わってくるものである。対して後者は、先行研究を言わば「古典として読む」場合に当たり、先行研究者がどのように思考し、どのように自らの主張を説得的に論証しているのかを学ぶというものである（「情報として読む」「古典として読む」については、内田、1985、pp. 11-17 を参照）。後者を念頭に置き、手本になる先行研究に出合うよう学生にアドバイスすることもある。

したがって、先行研究に向き合うということは、決してそれを乗り越えることを意味するばかりではない。「先哲の考え」との対話が「対話的な学び」において求められているのと同じように、先行研究を読み込む中でそれと対話し、自らの見識を広げ、思考を鍛えていくのである。そうすることで少しずつ自分のオリジナリティや、そのアピールの仕方もつかめてくる。

このように考えれば、なおのこと、いわゆる「コピペ」に代表される剽窃・盗用行為が研究倫理において禁じられている理由が理解できる。論文において新たな知見を報告するとき、そこには先人たちが苦心して積み上げてきた膨大な先行研究の蓄積が存在している。学びの対象としての先行研究は、同時に敬意を払うべき対象でもあり、それを無視したり、軽々しく扱ったり、ましてや剽窃・盗用したりすることなど、あってはならないのである。

（３）先行研究に出合うために

では、先行研究を探すにはどのようにすればよいのであろうか。一般には、①別の先行研究等の文献から探す方法、②論文検索システムや図書館などで探す方法をとることが多い。順に見てみよう。

まず①は、何らかの文献を読んで、そこから芋づる式に見つけていくという形である。この場合の「文献」には、もちろん先行研究となる論文や図書も当てはまるし、もっと平易な概説書や入門書なども含まれる。それらの文献には、多くの場合、末尾に引用・参考文献一覧が掲載されている。これはその文献を書くにあたって著者が引用あるいは参考にした文献をリスト化したものであり、ここをレファレンスとして詳しく見ることによって、言わば先行研究の先行研究に出合うことができるというわけである。

優れた文献は、必ず優れた文献一覧を備えている。そしてその一覧に挙げられている文献もまた、信頼のおける、質の高い文献であることが多い。先ほど「先行研究に学ぶ」ことの大切さについて述べたのは、この点にも関わっているのである。ただし覚悟しなければならないのは、ここで手掛かりにする文献が概説書ではなく先行研究文献であった場合、当該先行研究を真に検討するには、一覧に挙げられた文献にもひととおり目を通すべきだということである。そうすることで、先行研究の論証過程自体を検討対象にすることができるのであり、また、当該分野の研究動向を広くおさえることができる。

この①は文献探索の王道であるが、しかし先行研究の到達点あるいは最新の先行研究に触れるには向かないかもしれないという懸念がある。当然のことながら、引用・参考文献一覧に掲載された文献は、その一覧を備えた文献よりも前に発表されたものばかりである（まれに、「印刷中」として、発表前の文献が掲載されていることもある）。したがって、芋づる式に先行研究を辿っていく方法は、過去に遡っていくことにほかならない。①は、最初に触れる文献が最新のものである場合を除いて、通常、最新の先行研究を探すのには適した方法ではないと言える。

そこで②の方法が必要となってくる。論文検索システムとして、教育学の分野でしばしば用いられるものには、CiNii ResearchやJ-STAGE、Google Scholar などがある。いずれも、検索窓に適切なキーワードを入力して検索する形で、先行研究を探すことができる（それぞれ異なる仕方で検索結果を絞り込むことも可能）。検索結果からそのまま文献を閲覧できる場合もあるし、別途図書館等で現物に当たったり、取り寄せたりしないといけない場合もある。その他、研究

機関によっては自らの機関が発表した論文等のデータを収めたリポジトリというサービスを備えていることもある。

図書館を利用することも有効である。図書館で書架を直接見ながら探すことで、思いがけない出合いを果たすことはよくある。図書館では参考調査サービスが提供されていることが多く、文献探索に関するエキスパートである図書館司書のサポートによって、先行研究を探すという方法も可能となっている。所蔵されていない資料の場合は、相互利用サービスによって取り寄せたり複写してもらったりすることもできる。

最新動向をつかむという意味では、研究分野に関わる雑誌に当たるのもよい。本学会で言えば、学術誌では年報や各研究会の機関誌の他、商業誌では月刊誌『学校事務』(学事出版社) が該当する。特に後者のような商業誌は、政策動向や他校の実践の様子をコンパクトに知るうえできわめて有用である。また、研究テーマによっては、他分野の雑誌に当たることも必要となってくるだろう。こうした雑誌を追えば、研究や実践の最新動向をつかむことができるし、(雑誌によっては) 最新の先行研究に出合うこともできる可能性がある。もちろん査読の有無が玉石混淆とも言える状況を生み出していることも確かであり、雑誌に掲載されたものの水準を評価する目を培っていくことも必要である。

以上のような方法を駆使して、自分の手本になるような質の高い先行研究に出合うことができればチャンスである。時間をかけて先行研究を読み込み、そこから学びつつ検討を行い、ときには自分の行っている研究の意義や手続きを問い直しながら、論文投稿までの道を進んでいくことが期待される。

おわりに

以上、「実践レポート」の執筆を念頭に置きながら、先行研究との向き合い方について述べてきた。実践をしていて、報告すべき事例や明らかになった事実を得ることができたら、研究を深めるために先行研究を読み込んでもらいたい。そのような思いを込めて本講座を構成した。

既に書いたように、先行研究を網羅するには膨大な時間がかかる。体系的にメモを残しつつ、自分の論文に生かせる部分を広く探してもらいたい。そうすれば、自らの実践現場に閉じた知見から脱却して、(質的な意味で) 厚みのある論文を書くことができる。論文の質の高さには、優れた実践内容だけでなく、先行研究の検討を丁寧に行えていることも不可欠である。

本講座は、研究の出発点において不可欠な営みについて述べたとは言え、心構えに関するレクチャーが多くを占めており、やや具体性を欠く結果となったうらみがある。論文を書くにあたっての具体的な手順については、今後行われる講座や過去の大会で行われてきた講座を参照されたい (たとえば、久我、2021)。また、先行研究の検討を含め論文執筆の全体に関わるレクチャーとしては、本学会の Web サイトに掲載された過去の講座の動画が参考になる。視聴をおすすめする。

参考文献

- 内田義彦『読書と社会科学』岩波書店、1985 年。
- 市川伸一・鹿毛雅治・山本力「『教育心理学研究』実践研究のあり方、書き方、通し方を考える」『教育心理学年報』第 46 号、2007 年、p. 28。
- 下山晴彦・能智正博・植阪友理・中澤潤・市川伸一「心理学における実践的研究の有効活用に向けて」『教育心理学年報』第 48 号、2009 年、pp. 46-49。
- 田中耕治「論じる：探究の総仕上げとして」田中耕治・石井英真・八田幸恵・本所恵・西岡加名恵『教育をよみとく：教育学的探究のすすめ』有斐閣、2017 年、pp. 135-149。
- 久我直人「論文の全体構成と実践の論文化の意味と価値」『日本教育事務学会第 9 回大会要旨集』2021 年、pp. 22-25。